

沖縄の学力問題の現在

第5章の原稿を執筆してから10年近くが経過し、沖縄の学力の状況はやや変化した。例えば小学生は、2014年度から最下位を脱出し現在に至っている。ここでは「沖縄の学力問題の現在」と題して、補足として近年の沖縄の状況を概観してみたい。

2017年8月28日、沖縄の教育界に衝撃が走った。「全国学力・学習状況調査」の最新結果が文部科学省より発表されたのである。長年、沖縄県の子どもたちは、小学生・中学生ともに学力順位が全国最下位と低迷していた。「全国学力・学習状況調査」（以下「全国学力調査」）が2007年に始まってから2013年までの間、沖縄の順位はほぼすべての科目で最下位が続いていた。

対象	科目／年	2007	2008	2009	2010	2012	2013	2014	2015	2016	2017
小学生	国語A	47	47	47	47	47	46	32	32	21	42
	国語B	47	47	46	46	47	47	32	13	21	21
	算数A	47	47	41	46	47	47	6	6	4	7
	算数B	47	47	47	47	47	46	34	26	11	12
	理科	—	—	—	—	47	—	—	43	—	—
中学生	国語A	47	47	47	47	47	47	47	47	46	47
	国語B	47	47	47	47	47	47	47	47	42	47
	数学A	47	47	47	47	47	47	47	47	46	47
	数学B	47	47	47	47	47	47	47	47	46	47
	理科	—	—	—	—	47	—	—	47	—	—

表1) 沖縄県の子どもたちのこれまでの47都道府県中の学力順位

※文科省「全国学力・学習状況調査」をもとに作成 注1) 2011年は東日本大震災の影響で集計なし

注2) 2016年は熊本地震の影響で46都道府県中の順位 注3) 2016年の中学国語Bの42位は同点最下位

転機となったのは2014年、小学生が初めて最下位を脱出し、算数Aで6位になるなど、飛躍的に順位を上昇させた。現在でもそうした順位を維持している。もっとも、中学生は依然として最下位記録を更新しており、沖縄における学力問題は深刻な状況が続いていると言える（表1参照）。

最初に「衝撃が走った」と述べたが、それは2017年が沖縄の教育界にとってターニング・ポイントとなる重要な年として注目されていたからである。なぜならば、2014年に初めて最下位を脱出した小学6年生の子どもたちが、3年を経て、中学3年生になって全国学テに参加していたからである。普通に考えれば、小学生時点での学力順位は、中学生の順位に影響するはずである。もっと言えば、そのままの順位を維持して平行移動するのが自然だろう。ということは、2014年に算数Aで6位を獲得した小学6年生が、中学3年生の数学Aで再び6位になっても不思議ではない。

ところが、その世代の子どもたちの順位は、中学生でまた最下位に戻ってしまった。

「衝撃」だったのは、今回の結果が沖縄の教育界のそうした期待を見事に裏切るものであったからである。こうした小学生時の学力を維持できないという中学生の状況は、沖縄の新たな教育上の課題となったと言えるだろう。

ではなぜ中学生で学力が最下位に戻ってしまうのか。現段階では仮説だが、家庭の教育力の脆弱性が今も続いているからと考える。学力上昇後の小学生の生活習慣は今も変わっていない。例えば、学力と大きく関連していることがわかっている朝食の摂取率は、学力の上昇後も伸びていない。朝食だけでなく睡眠の状況も親子間の会話も、家庭の教育力を示すと言える項目の数値がほとんど変化せず、順位も上昇していないのである（図1参照）。ちなみに秋田はすべてにおいて高い数値と順位を示している。

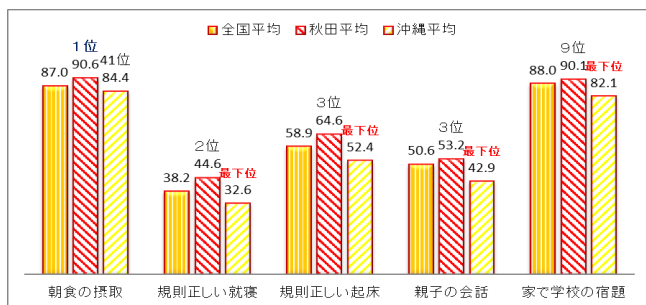


図1) 家庭の教育力の比較 (2017年小6：している率)

つまり今の沖縄の小学生の学力上昇は、家庭の教育力に支えられた真の向上ではなく、学校だけの力で上がった一過性のものであると言える。よって中学生になり学習内容が難しくなると学校だけでは支えきれなくなり、順位も最下位となってしまうと考えられる。沖縄県は今回の学力調査の結果により、小学校段階ではある程度の学力を保っていても、中学校段階で大きな落ち込みを見せるというパターンを辿っていることが明確となった。これをここでは「下降型」と分類しておきたい。47都道府県の中では高知県などもこのタイプに属すると思われる。

理想と言えるのは、秋田や福井、富山、石川のように、小学生も中学生も高い順位を維持しているタイプであろう。秋田の順位は、すべての科目で1位というわけではないものの、高い順位を維持している。こうした都道府県を「維持型」と命名しておきたい（表2参照）。

逆に、かつての沖縄県のように小中共に低い順位に停滞しているタイプもある。現在では大阪府や北海道などがこれに該当するであろう。「停滞型」と命名しておきたい。

ただ最も注目したいのは、静岡県や愛知県のように、たとえ小学校段階では停滞し

ていても、中学生で大きく上昇するタイプである。表3は静岡県の小中学生のこれまでの学力順位を示したものであるが、小学生はおおむね低く、中学生はおおむね高いことがわかる。「上昇型」と命名できるだろう。

対象	科目／年	2007	2008	2009	2010	2012	2013	2014	2015	2016	2017
小学生	国語A	1	1	2	1	1	1	1	1	3	1
	国語B	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	算数A	1	1	1	1	1	1	1	1	3	2
	算数B	1	1	1	1	1	1	1	1	2	3
	理科	—	—	—	—	1	—	—	3	—	—
中学生	国語A	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	国語B	1	3	1	1	1	1	2	1	1	1
	数学A	2	2	2	2	2	2	2	2	2	3
	数学B	3	3	3	2	1	2	2	2	4	3
	理科	—	—	—	—	4	—	—	2	—	—

表2) 秋田県の子どもたちのこれまでの47都道府県中の学力順位

※文科省「全国学力・学習状況調査」をもとに作成

注1) 2011年は東日本大震災の影響で集計なし 注2) 2016年は熊本地震の影響で46都道府県中の順位

対象	科目／年	2007	2008	2009	2010	2012	2013	2014	2015	2016	2017
小学生 (6年生)	国語A	11	25	20	32	32	47	24	15	6	35
	国語B	9	12	37	18	28	40	8	9	11	8
	算数A	18	27	19	33	36	36	14	11	13	28
	算数B	16	19	22	24	24	36	17	17	10	12
	理科	—	—	—	—	43	—	—	29	—	—
中学生 (3年生)	国語A	9	10	7	11	10	17	7	17	7	12
	国語B	4	7	8	6	14	13	8	6	3	6
	数学A	9	5	7	8	5	14	5	8	8	6
	数学B	8	7	6	6	6	5	3	4	5	5
	理科	—	—	—	—	9	—	—	8	—	—

表3) 静岡県の子どもたちのこれまでの47都道府県中の学力順位

※文科省「全国学力・学習状況調査」をもとに作成

注1) 2011年は東日本大震災の影響で集計なし 注2) 2016年は熊本地震の影響で46都道府県中の順位

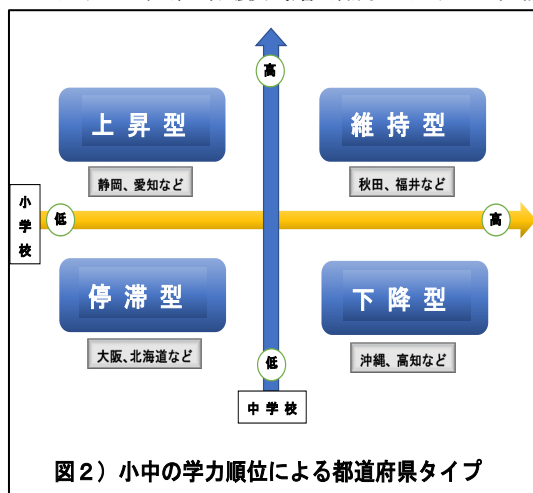


図2) 小中の学力順位による都道府県タイプ

こうした都道府県が小学校から中学校段階にかけてどのような教育を行っているかに注目することで、真の意味での永続的な学力向上のヒントが得られるのではないだろうか。これまで研究者は秋田や福井に注目してきたが、今後は静岡のように「上昇型」の都道府県に注目し、その要因の詳細な分析が必要である。

(西本裕輝)